深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **室生犀星「小景異情」（二八六～二八七ページ）において、「ふるさと」と「みやこ」はどのような関係にあるか、作者の生きた時代なども参考にして話し合ってみよう。**

【答】 それぞれ異なる生活感覚や文化があり、空間的にも心情的にも簡単に行き来することができない、相反する要素を帯びた関係にある。

▼ポイント▲ 当時、東京と各地方の間には、生活規範や人間関係のあり方を含めさまざまな点で著しい差異があった。現代と比べて、空間的にも心理的にもその隔たりが大きかったことにも注意を向けてみたい。犀星の場合、「ふるさと」が古都・金沢であることが「みやこ（都）」の意味付けに複雑な陰影をもたらしているものの（「鑑賞」参照）、教室での鑑賞においては、詩人の生きていく「みやこ（都）」と「ふるさと」が相容れない場所であることが重要となろう。

2 **萩原朔太郎「およぐひと」（二八八ページ）では、全体的に平仮名表記が多用されているが、それがどのような効果をもたらしているか、考えてみよう。**

【答】 柔らかい流線形の平仮名を多用することで、水の中で泳ぐ身体のイメージが喚起されやすくなっている。

▼ポイント▲ 「心臓（こころ）」や「瞳（め）」などの表記が印象的に使われている詩篇だが、それ以外の大部分が平仮名で表記されていることも、その詩的効果に大きく寄与している。平仮名で示された部分が地の役割を担うことによって、漢字で表記された具体的な器官や月の像が図として浮かび上がってくるのである。

3 **宮沢賢治「永訣の朝」（二八九～二九二ページ）において、「いもうと」への思いと「みぞれ」や「雪」との描写は、どのように関連しているか、まとめてみよう。**

【答】 詩篇前半においては、「みぞれ」は空を「へんにあかる」くしており、その異様な天候は「いつさう陰惨」である。「蒼鉛いろの暗い雲」から「びちよびちよ沈んでくる」とあるように、「みぞれ」は「いもうと」の死を前にした「わたくし」の心情と同じく、暗く重苦しいものとして描写されている。しかしながら、「いもうと」の頼みによって「雪」を椀に集めた「わたくし」は、「このうつくしい雪」が「みぞれ」と同じ「おそろしいみだれたそら」から降ってきたことに気がつき、その清らかさ、美しさに

導かれて、「いもうと」や他の人々のために祈る気持ちになる。

つまり、「みぞれ」の描写は「いもうと」との別れに悲しみ乱れる心情、「雪」の描写はその悲しみを超えて、「いもうと」を含めた多くの人々のために祈ろうとする心情と関連している。

▼ポイント▲　「わたくし」の心情の転換点は、雨雪をとってきてくれという「いもうと」の頼みが、自分自身のためではなく、「わたくし」を「いつしやうあかるくするため」であったと気づくところにある。来世では「わりやのごとばかり」考えず、利他的に生きたいとする「いもうと」の願いの象徴が「雪」であり、「わたくし」はその美しい思いを受け止めている。「みぞれ」と「雪」の描写のなかには、個人的な悲哀から、より広く深い他者への思いへの転換が含まれていることを確認したい。

4　**茨木のり子「汲む」（二九四〜二九六ページ）において、「大人になる」ことと「初々しさ」とはどのような関係にあるか、作者の考えの変化を中心にまとめてみよう。**

【答】　当初は、世慣れない態度や傷つきやすさ、頼りなさを単に未熟な状態と捉えており、「大人になる」ために否定的に克服しようとしていたが、それらが大切な「初々しさ」でもあることに気づかされてからは、むしろ、精神的に堕落していない「大人」になるために必要なものと思うようになった。従って、「大人になる」ことと「初々しさ」とは、当初は二者択一的な関係であり、前者を選ぶべきものと捉えられていたが、女性との出会い以降は、難しいが両立させるべきものとして捉えられている。

▼ポイント▲　女性との出会いの前後では、「私」にとっての「大人」の像が変わっていることに注意したい。冒頭で述べられる「大人」は「私」にとって目指すべき具体像を伴わない概念であるため、世間知を積んで動じなくなった人間としてしかイメージされないが、個別具体の「素敵な女のひと」とその言葉に触れて以降は、堕落を拒み、「いい仕事」にも連なるような「大人」を目指すようになっている。それまで考えていたような「大人」にならないために、「初々しさ」を保つことこそ「難しい」という認識の転換が起こっているわけだが、それが実に難しいからこそ、「私」は後年になっても、「かつてのあの人」の言葉にたちかえり、何度もその意味を「汲む」必要があるのだということを理解したい。

5　**詩の中で用いられている比喩や反復などの表現技法を抜き出し、それらが、それぞれの作品の文脈の中で、どのような効果を持つか、考えてみよう。**

【答】

［小景異情］…「遠きみやこにかへらばや／遠きみやこにかへらばや」（二八七ページ）

本当は涙が出るほど故郷が恋しいのだが、その心情を抱えながらもやはり都（東京）に帰ろう、都（東京）しか帰るところはないのだ、というこの詩編の主題を反復によって強調している。

［およぐひと］…「およぐひとのからだは」「およぐひとの心臓は」「およぐひとの瞳は」「およぐひとのたましひは」（二八八ページ）

「およぐひとの～は…」と主部を反復することで、述部がそれぞれ際立つ効果がある。また、同じ平仮名が連なることによって、視覚的にも柔らかい水中のイメージが喚起されやすくなっている。

［永訣の朝］…「（あめゆじゆとてちてけんじや）」（二八九・二九〇ページ）

雨雪をとってきてくれ、という「いもうと」の言葉が「わたくし」の心の中で重層的な意味合いを帯びてくる様子が、四度の反復によって効果的に表されている。最初、熱に苦しむ「いもうと」のためと思って外に飛び出してゆく場面では、「わたくし」にとってこの言葉は兄を頼るかよわい者の願いとして響いている。兄妹として一緒に育ってきた間、「いもうと」はこれまでもこのような言葉で「わたくし」を頼ってきたであろうことも、この言葉を何度も反芻する「わたくし」の様子から想像される。しかし、「いもうと」は単に兄を頼ったのではなく励まそうとしたのだと「わたくし」が気がついたことで、最後の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」は、「ありがたう」「わたくしもまつすぐすすんでいくから」という感謝の念と向き合うようにして反復されており、崇高な希望の言葉に変化しているのである。

［汲む］…「頼りない生牡蠣のような」「年老いても咲きたての薔薇」（二九五ページ）

「頼りない生牡蠣のような」は直喩、「咲きたての薔薇」は隠喩であるが、いずれも心のありようの比喩であり、これら身近な具象の質感や形態を想起させることで、柔らかさや傷つきやすさを具体的かつ印象的に表現している。

▼ポイント▲　反復や比喩は詩の最も基本的な技法であり、多くの作品において、主題と密接に関連している。四篇の中で「汲む」についてのみ反復法が使われていないが、それはこの詩が日常のささやかな気づきを主題としており、感情をたかぶらせ揺さぶるような反復の技法とは折り合わないからである。「小景異情」と「永訣の朝」に関しては、郷愁や死別に関わる大きな情動を主題としているゆえに、各詩篇の感情の核となる部分で効果的に詩句が反復されている。また「およぐひと」に関しては、日常感覚から逸脱した強度あるイメージを表出するため、感情の強調ではなく視覚的効果に寄与する反復がおこなわれており、これも一篇の主題と密接に関わっている。

言葉と表現の解答例

1 **「涙ぐむ」（二八六・7）の接尾語「ぐむ」には、どのような意味と働きがあるか、調べてみよう。**

【答】（四段型活用）名詞に付いて動詞を作る接尾語。何らかのきざしが現れてくること。

2 **動詞「汲む」（二九六・7）について、詩の中で使われているのと同じ意味での使い方になるよう、短文を作ってみよう。**

【例】
・どうか私の真意を汲んでほしい。
・事情を汲んで、彼の責任は追及しないことにした。

（阿毛久芳・山本康治・田口麻奈）